

## 「ザンビアに暮らして」

シニア海外ボランティア 平成 25 年度 3 次隊  
公衆衛生 山科 司

JICA ザンビア事務所初の女性シニアボランティアとしてルサカに着いてから二年近く、あっという間に過ぎていった。その間、シニアらしく腰痛で動けなくなったりもしたが、比較的温暖な気候も幸いし、病気の多い病気もすることなく過ごせた。

米国を除くと、ここザンビアは、私にとって初めての平和な国である。銃声も砲弾音も聞こえない。ゲリラもでないし、地雷も埋まっていないし、戦車も走ってはいない。経済不安から時々小さな暴動が起こることもあるが、ミサイルが飛んでくるわけでもなければ、戒厳令が敷かれることもない。強盗やスリ、病気に気をつけていれば、至って平穏無事に暮らせる国である。また、緑が多く、空が広い。首都ルサカにもナイロビのような高層ビルはなく、見あげると東西南北、空だらけである。ブッシュは多いが、野生動物を見ることはない。「みんな喰ってしまったからね」そう言った同僚の言葉を、不覚にも二年近く信じてしまった。



チョングエにもまだ食べられていない象がいた。可愛いJOCVと。

### 挨拶

私の配属先は首都ルサカから車で1時間足らずのチョングエ・タウンにある郡保健局で、このPublic Health Unitで活動した。任地に来てまず閉口したことが挨拶のくどくどしさである。「Good morning」のあとの”How are you?”は必須、”I’m fine”と答えた後には必ず”How are you?”と聞き返さねばならない。そうすると相手が再び”How is home?”とか”How is work?”と聞いてくる。しかも、小さなオフィスですでに”I’m fine”と他の人に答えているのを聞いているにも関わらず、別の人が”How are you?”と聞いてくる。一人一人と同じやりとりを、初めから繰り返さなければいけないのだ。”Good morning”とか”Hi!”だけでいいじゃないか。私の家が火事に遭おうと洪水に遭おうと、あなたには関係ないから…二年間、毎朝ぶつぶつ心の中でつぶやいていた。

### 女性と子供

挨拶と同様に閉口するのが、「子供は何人?」「家族は日本においてきたのか?」という質問である。初めのうちは「一人身だ」と真面目に答えていたのだが、「なぜ結婚しないのか」「子供は欲しくないのか」と、これまたうるさい質問を浴びせかけられる。プライバシーの問題だ、と言っても容赦ない。

ザンビアでは、女性は当然結婚するものであり、当然子供を産むものであると考える。子供を産んで初めて普通の女性と認められるのである。子供がいないと「どこかおかしいんじゃないか」と陰口をたたかれる。男性も同様に子供を持っていないと普通ではないと思われるが、とりわけ女性の価値は子供を産むことにある…らしい。

日本でも石女(うまづめ)という言葉があったし、「嫁して三年子なきは去る」という考えも戦後

まで続いていた。同僚によると、ザンビアでは4年だそうである。結婚して4年経っても子供ができない場合は、離婚理由になるという。子供ができないことは恥ずかしいことであり、同性からすら蔑まれる。そのため、結婚よりも出産を急ぐ女性が多くなる。経済的に安定してから子供を…、学業を終えてから子供を…という考えをする人はまだ少数派である。何はなくてもまず子供、なのだ。男性不妊に対する知識がまだ浅いため、不妊原因を女性に求めることが多い。子供を持っていなければ変な目で見られる。何か言われる。それが恐ろしくてとにかく子づくりを優先する。とりあえず(?)一人子供を産みさえすれば、女性は安心できるらしい。父親が誰かはあまり問題にならないし、いなくても問題にならない。そういうところは羨ましい気がするが…。

それにしても、初めて会う人毎に「子供は何人いるのか」と同じ質問を繰り返されるのは煩わしい。「子供は1ダース。旦那は5人で皆国籍が違うけど、どれかいる?子供は色とりどりだよ」と、今では真顔で答えている。

ザンビアの小さな子供は本当に可愛い。5~6人連れて帰りたくなる。くりくり目玉が何とも言えない。世界一可愛いのではないかと思うくらい可愛い。それが大人になるとどうして…



双子の片割れ あゝ可愛い

## トイレ事情

任地に入って半年後、NGOとともにコミュニティーに入り、トイレと手洗いの設備などを検分して歩くようになった。田舎に入るとブッシュの中にポツン、ポツンと家が建っている。人は住んでいないとばかり思っていた山の奥にも村があった。村と言っても、一軒一軒が恐ろしく離れている。電気や水道などはもちろんないが、巨大なバオバブの木があったり、金を含んだ岩がそこら辺にころがっていたりする。星空はさぞかし美しいだろうと思うが、極端な方向音痴の私としては、闇夜を考えただけで空恐ろしい。

トイレは住宅から少し離して建ててあり、茅葺きのマッシュルーム・ハウスが多い。外見は小さくてかわいらしい。中は暗くて臭いが、たいていの場合、掃除は行き届いている。ほとんどが pit latrine、いわゆるポットン便所である。汲み取り式ではなく、深く掘った穴が汚物でいっぱいになると埋めてしまい、新しく穴を掘る。田舎では、木の枝で囲っただけのトイレをよく見かける。隙間だらけで囲いが意味をなしていない場合も多く、女性にとってはつらいものがある。私もこういうトイレを使うことができず、フィールドに出ると朝から夕方帰宅するまで、トイレに行かない。熱中症になるか、膀胱炎になるか、微妙な賭けをしながら飲水を調節するのである。



こんなトイレ嫌だ…

## 葬儀

ザンビアではチテンゲという布を腰に巻きつければ礼装になる。「チテンゲだけは1枚持っておかないとだめですよ!田舎ではしょっちゅう葬式がありますからね!」赴任前に協力隊員からそう教えてもらった。ザンビアの冠婚葬祭の中で最も大切な行事は、おそらく葬儀であろう。たくさんの人が参列しないということは人望がなかったということであり、恥ずかしいことらしい。死んで

しまったらわかりはしない…などと言ってはいけないようである。自分の時にたくさんの人に参列してもらえよう、近い人の葬儀には何をおいても参列するのである。

アフリカではどこの国でも死が身近である。マラリアなどの感染症が多いため、2~3日寝込んだだけであっけなく亡くなることもある。病気だけではなく、事故、自殺も多い。一番仲の良いザンビア人の友人は、1~2年の間に両親と夫、可愛い盛りの娘を立て続けに亡くしている。ご主人は少し体調が悪いと言って家で二週間足らず寝込んだ後に亡くなり、娘さんは週末にマラリアのため発熱したかと思うと、病院に連れて行く間もなく亡くなったと聞いた。私の母は生前、兄嫁に「ぽっくりと死んじゃいけないよ。たとえ10日でも1週間でも寝込まないといけない」と話していたそうである。ぽっくり逝ってしまうと、残された者が何もしてやれなかったと心を痛めるから、ということらしい。その言葉通り、母は私たちに十年間、介護する時間をくれた。それでも悲しかったのに、友人の悲嘆は察して余りある。せめて、「十分な医療を受けさせることができた」「十分看てやれた」と自分を少しだけでも慰めることができる社会になって欲しい。

こちらでは時々、歌を歌っている大勢の人を荷台に乗せて走っているピックアップを見かけることがある。来たばかりの頃は、楽しくて歌っているのだろうと思っていたが、あるとき、その人たちの真ん中に棺桶が置かれていることに気がついた。墓地へ埋葬に行く途中だったらいい。ルサカの墓地は区画がある程度はっきりしているようであるが、少し郊外になると、ブッシュの中を歩いていたら突然墓地に入り込んでしまうことがある。墓石が置いてある墓もあるが、盛り土に板切れを差し込んだ簡素なものや、盛り土だけの墓も多い。墓参の習慣はあまりないらしく、数年たつとどこに埋葬したのかわからなくなることもあるという。JICAでは年に一度、物故隊員の墓参に行くが、新隊員は大抵、目印の無い盛り土の上に立ってしまう。もしも、その下には…。

## 虫

アフリカが大好きな私は、虫が大嫌いである。アフリカの大地を踏むと本当に幸せな気持ちになるのだが、グロテスクな虫を見ると途端に来たことを後悔する。チョングエの借家には蜘蛛が多い。足が長く、平たくて大きな蜘蛛である。最初のうちは殺虫剤片手に追いかけてまわしていたが、巣を張らないし、毒も持っていないようなので、同居可とした。早い話、殺虫剤がいくらあっても足りないことに閉口したためである。

雨期に入ると、たくさんの虫が家の中に入り込んでくる。朝起きると、室内が虫だらけになっていて、泣きそうになった。雨期が終わって五月ごろになると、今度は大きなバッタが何匹も入り込む。ある時あまりに沢山のバッタが死んでいたのので、ワーカーを呼んで片づけてもらった。「美味しいのに…」とつぶやくワーカーに、思わずクビを言い渡しそうになった。結局、大嫌いな虫と泥棒、どちらを選ぶか二者択一した結果、いとも簡単に虫は泥棒に勝ち、窓の外の防犯灯を取り外した。有刺鉄線をめぐらした扉にも防犯灯があるので、十分安全であると踏んだうえであるが、これで虫の侵入からは解放された。幸い、泥棒も侵入してこなかった。

だが、防犯灯と関係なく入り込む奴がいる。言わずと知れたゴキである。ときどき仰向けにひっくり返ってジタバタしていることがある

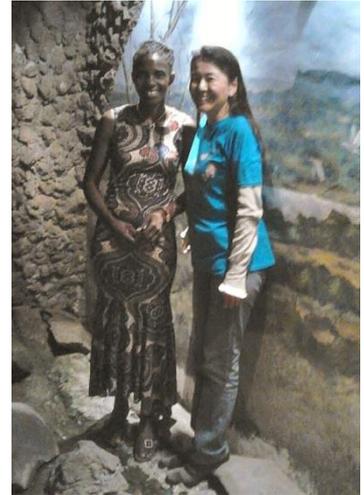


住友化学の蚊帳を配布 チョング  
エ郡保健局長と

のだが、気色悪くてこれを処理できない。ある日、数日間放っておいた仰向けゴキが忽然と姿を消した。…と思ったら、近くに羽を発見。同居しているヤモリか、入り込んだトカゲの仕業らしい。ゴキを食べてくれるのは有難いが…、「お願いですから行儀よく完食してください！」。

とりとめのないことを思いつくがまま書き綴ってみたが、チョングエと言うルサカ近郊の町でバス・トイレ完備の家に住まわせていただいたこともあり、日常生活は日本と大差なく、さほど不便を感じることなく過ごせた。

これまでは看護師として緊急援助に参加してきたが、ザンビアは公衆衛生学を専攻した後の初めての開発援助となった。しかし、ここでもやはり、緊急援助の時と同様「援助漬け」「援助慣れ」が常態化している現実を見た。むしろ、それは緊急援助の場合以上に、多くの一般の人たちの間に広く、深く浸透してしまっていると思う。日本の援助は、キリスト教的価値観を基盤にした欧米諸国の援助とは一線を画し、単なる施しではなくあくまでも自助努力を要求する。JICA 専門家の方々の仕事は、米国の大学院でも高く評価されていた。電気も水道もないところで頑張っている若い協力隊員も多い。こうした日本の援助活動がもっともっと世界に評価されるよう願ってやまない。



一番の仲良し 保健局 MCH の  
Jean と